

話題48

「ラサール神父物語」の編集後記

ラサール神父との出会いは、私が高校生の頃でしたので約50年も遡ることができる。情熱あふれる青年宣教師ラサール神父とさわやかで穏やかな笑顔のルイス神父が対照的に思い出される。

自叙伝をまとめるお手伝いを思いついたのは、地球の果て、未知の地で宣教師として生きる人間の背中を押す「力」は何か、そして沖縄の地に根をおろす、その土壌は何かを探ることにあった。

自分なりに資料を整理しつつ、その「何か」に迫ってみた。人の縁、出会いとは「不思議」なものである。「日本、日本人とラムネ」。不思議な味の「ラムネ」は、日本に対する強烈な好奇心を駆り立てた。

そして、1958年9月16日の午前2時、来沖初日の沖縄の空気がニューヨークの生家の地下室の臭いと同じであったことは、何らの抵抗なく地に足をつけることができた第一条件であったものと思われる。

その第一の条件を受け入れるには歴史的な背景があった。ご本人が指摘するように、イングランドの血がながれ、その血は開拓者の魂、改革の精神を含んでいた。

禅宗の崎山老師とカトリックのラサール神父の意気投合する、その一点については、当初、「型」から入り、「型」を脱する「宗教心」の側面に求めた。そうではなかった。

その解答は、老師の文章の中にあった。「貧乏であることは、宗教家には最もふさわしい姿である。修行そのものが、捨てることにあるのかもしれない。地位も、名誉も」と記されていた。

宗教改革の中で、原点に立ち返り、清貧であることを求めたフランシスコ・カプチン会の姿勢とぴったり一致する。

「・・・自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人として私の弟子ではありえない。」(ルカ14・33)。

そこに老師と神父の足並みのそろった歩調を見つけた。

老師の語る「祈りと瞑想」、神父の求める「神秘」。両者の求める方向

性もまた同一なのかも知れない。仏教、ことに禅宗においては「不思議」という用語で表現され、ラサール神父が用いる「神秘」もまた同様のことを意味するのではないかと考えた。また、仏教用語の「懺悔」、神父の語る「悔い改める」という用語、さらには神父の論文に用いられた「遊び」という表現も、禅宗においても用いられており、限りなく「宗教心」の根幹の部分において意気投合し、兄弟の杯を交わす必然性が存在したものと推測した。

さらに神父は、沖縄の土着の御嶽（うたき）の信仰にカトリックの信仰の「礎」を見いだしている。

主はこういわれる。

見よ、わたしは彼女（エルサレム）に向けよう
平和（神の恵みに満たされた状態）を大河のように、
国々の栄を洪水の流れのように。

あなたたちは乳房に養われ
抱いて運ばれ、膝の上であやされる。

母がその子を慰めるように
わたしはあなたたちを慰める。

（イザヤ66・10）

「膝の上であやされる。母がその子を慰めるように」。この信仰は、まさしく沖縄の「御嶽（うたき）」の信仰と一致する。

イングランドの血、不思議な飲み物「ラムネ」、沖縄の空気、そして土着の「御嶽（うたき）」の信仰は、ラサール神父がウチナーンチュ（沖縄県人）になりきった、「縁」そのものであったのではないかとまとめたい。

2016年12月 石川清司